

鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査 第10報

標識ツル類の観察資料 2. (昭和61年度)

安部 直哉*・藤村 仁*

Studies of the Cranes in Izumi, Kagoshima, Japan. 10.

The Observations of Ringed Cranes 2. (1986—1987).

Naoya Abe* and Hitoshi Fujimura*

序

1985—1986年(昭和60年度)の「出水平野におけるツル類の基礎調査」中に得られた標識ツル類の観察資料はすでに報告し(安部ほか, 1987。), 同報では, ごく一部の標識鳥については1986—1987年(昭和61年度)の状況も付記しておいた。本報では, 1986—1987年(昭和61年度)の調査中に得た標識鳥に関する知見をまとめて報告した。

情報を提供して下さった鶴監視員又野末春氏ならびに協同調査者の方々にお礼申し上げる。

調査方法

調査期間 昭和61年度の「出水平野におけるツル類の基礎調査」は, (1)1986年11月6—15日, (2)同年12月7—13日, (3)1987年1月6—12日, (4)同年1月18—21日, (5)同年2月6—14日, (6)同年3月13—18日に行なった。上記調査期間中に, 総数調査, 分散状況調査, 幼成調査などと併行して標識鳥の探索, 家族構成調査を行なった。

用語解説 (1)生後, 初めて越冬期をすごしている個体を幼鳥, それより高齢(満1歳以上)の個体は成鳥とし, 本報では亜成鳥という区別は用いなかった。第1回冬羽の個体すなわち幼鳥とそれより高齢の個体の判別は, きわめて少数の特殊個体以外は, 注意深く観察すれば, 越冬期間中むづかしくはない。(2)鳥類標識調査で用いられている個体識別番号が刻印されている金属製の脚環を金属脚環と略記した。(3)本報で給餌地区と記した地区は「出水平野におけるツル類の基礎調査」の他の諸報告で用いた区画割による地区と同じで, 第3報では遊休地と記した地区と同一である。

標識時の基礎資料 昭和60年度までに標識されたツル類の羽数, 幼成別, 家族構成など標識捕獲時の基礎資

* 国立科学博物館附属自然教育園(非常勤), Institute for Nature Study, National Science Museum (TDY).

料は、山階鳥類研究所・標識室の各年度報告(1983, 1984, 1985, 1986)の記述によった。しかし昭和61年度の標識ツル類については、いまだに基礎資料は発表されず、昭和61年度報告書(同室, 1987。)には標識羽数しか記述されていないので、同年度の標識鳥の一部については、又野末春氏から情報をいただき、参考にしたい。

調 査 結 果

観察できた各標識鳥を野外標別用の色脚環の色・記号・番号で表わし、家族構成、観察地域、幼成などを概説した。

昭和61年度以前に標識されたツル類 この項の個体は満1歳以上のいわゆる成鳥である。

ナベヅル

橙色 2 1979年生まれの満7歳鳥で、生年が明らかな標識鳥のなかで最高齢個体である。1986年11月, 12月, 1987年2月に西干拓地, 給餌地区で観察され, 番と幼鳥2羽の4羽の家族であった。体の大きさと行動から, 雌であろう。越冬中, この家族は明確な定住場所を占めていなかったようである。

橙色 10 1986年11月に又野末春氏によって観察されたが, 著者等はこの個体を一度も観察できず, 家族構成は不明。

橙色 14 1987年1月の調査中に給餌地区内で観察され, 番と幼鳥1羽の3羽の家族であった。

橙色 25 1986年12月8日, 給餌地区内で採食中の大群内に観察されただけで, 家族構成は明らかに出来なかった。

黄色 J 09, J 36 西干拓地, 給餌地区で観察され, J 09とJ 36は番で, 幼鳥1羽をつれた3羽の家族。

黄色 J 21 1987年2月7日には, 分散調査中に武本地区小原上で観察され, 番と幼鳥2羽の4羽の家族であった。しかし他の月には, この地域で観察されなかった。

黄色 J 22 東干拓地, 西干拓地, 給餌地区で観察された。幼鳥をつれていない番の2羽の家族と思われた。

黄色 J 23 1986年11月, 12月, 1987年2月, 3月の調査中に給餌地区で観察されたが, 大群に入っていて, 家族構成は明らかに出来なかった。

黄色 J 24 観察回数が少なく, 家族構成は不明。

黄色 J 26 西干拓地, 給餌地区で大群内に何度も観察された。番関係は不明であるが, 子供をつれているとは思われなかった。

黄色 J 28 1986年1月の分散調査中に野田川流域地区の群内に観察された。しかし他の月の調査では観察されず, 家族構成不明。

黄色 J 30 1986年12月, 1987年2月に給餌地区で観察されたが, 採食中の群内に入っていて家族構成は不明。

黄色 J 31 1987年1月調査を除き, 毎月の調査に東干拓地と給餌地区で観察された。1986年12月7日の観察では, 番になっていなかったが, 1987年3月15日には2羽で行動しており, 番になっていると思われた。この個体は1984年生まれで, 前冬1985—1986年期には番になっていなかったことから, 満2歳の今越冬中に初めて番を形成したのであろう。

黄色 J 37 1986年12月以後, 東干拓地と給餌地区で毎月観察されたが, 大群内にいるため家族構成は明らかに出来なかった。

黄色 J 40, J 41 J 40とJ 41は前冬は幼鳥2羽をつれた4羽家族であった。しかし今期は, 毎月観察されたが, 幼鳥をつれていなかった。

黄色 J 42 給餌地区の群内に数回観察されたが、群内にいて家族構成は不明。

黄色 J 43 西干拓地、給餌地区に数回観察されたが、群内にいて家族構成は不明。

黄色 J 44 この個体は、出水地方で越冬するナベヅルとしては例の少ない、虹彩が黄色である。主に西干拓地で観察され、番だけの2羽家族であった。体の大きさから雄であろう。

黄色 J 45 西干拓地、給餌地区で観察され、番と幼鳥1羽の3羽家族であった。体の大きさから、J 45は雌であろう。

前報（安部ほか、1987。）にも記しておいたが、山階鳥研・標識室（1985, 1986）によれば1985年1月にJ 44とJ 45は番として標識されたことになっている。前年期の観察でも、J 44とJ 45は番ではなかった。

黄色 J 49 番と幼鳥1羽の3羽家族。1986年11月初めから12月上旬までは、この家族は、前冬に番だけの2羽家族としてJ 49が日中定住した野田川と高尾野川の河口部の水田跡に定住していた。しかし、12月からJ 49の3羽家族の定住場所の北側の水田跡に番と幼鳥2羽の4羽家族がよく侵入するようになり、1987年に入ると、J 49の家族は上述の場所に定住しなくなった。

黄色 J 50 番と幼鳥2羽の4羽家族。J 50が番だけの2羽の家族で前冬ずっと定住した古浜内にこの家族は定住した。J 50は雌。J 50の番の相手の雄は、かなり気が強く、他のナベヅルに対して定住場所をよく守って生活していた。

白色 A 50 東干拓地、給餌地区で毎月観察され、番だけの2羽の家族であった。1987年3月13日には、給餌地区内でこの番に幼鳥2羽がくっついて行動しているのが観察された。これは、繁殖地への渡りが始まる頃から見られる、番とその子供の離別によって、親鳥から離れた別の番の幼鳥が、一時的にA 50の番についていたのであろう。

白色 A 51 1987年2月と3月の調査中に給餌地区内の群内で観察されたが、家族構成不明。

白色 A 53 この個体も、観察回数が少なく、家族構成は明らかに出来なかった。

野外識別用の脚環を付けていない個体 左脚の金属脚環の外側に白色の補助環を付けたナベヅル1羽が1985年12月に放鳥されている。この個体と思われる鳥が毎月観察された。しかし群内にいることが多く、家族構成は不明。

黄色 J 52, J 53 観察回数は少ないが、J 52とJ 53は番だけの2羽の家族であった。

黄色 J 56 1986—1987年期のこの個体（満1歳）の特異な羽毛については、すでに前報（安部ほか、1987。）に記した。さらに、この個体は1986年12月以後、右足の全部の指が外側に反り返り、歩行障害をきたしていた。給餌地区に何度も観察され、番にはなっていなかった。

黄色 J 57 又野氏による1986年11月の観察では、番と幼鳥2羽の4羽家族である。著者等は、1987年1月と2月に給餌地区の採食中の群内に何度もJ 57を見つけたが、家族構成は不明であった。

黄色 J 58 毎月、給餌地区で採食中の群内に何度も見られた。家族構成は不明。

黄色 J 59 J 59とJ 60は番で、J 62とJ 63はその幼鳥として、前冬の1986年1月に標識され、標識放鳥後の1986年2月にこの4羽の家族がまとまって生活しているところが観察されている（安部ほか、1987。）。しかし1986—1987年期には、J 59（雄）の番の相手J 60は全く観察されず、J 59は他の個体と番になっていた。J 59は、1987年1月、2月、3月の調査期間中に西干拓地と給餌地区内で観察され、番と幼鳥2羽の4羽家族と思われた。しかし1月10日には、この家族に別の幼鳥1羽がついており、2月9日にはこの家族に別の幼鳥3羽がつき、また3月13日にもこの家族に別の幼鳥1羽がついて一緒に行動していた。

黄色 J 61 給餌地区で採食中の群内に数回観察されたが、家族構成不明。

黄色 J 63 西干拓地、給餌地区で採食中の群内に数回観察されたが、家族構成不明。

黄色 J 64, J 65 J 64が雄、J 65が雌。番だけの2羽家族。毎月、西干拓地、給餌地区で何度も観察され

た。

黄色 J 66 1987年3月27日, 柳澤紀夫氏によって, この個体と思われるものが観察されただけで, 家族構成は不明。

黄色 J 69 又野氏によると, 1986年11月に番と幼鳥1羽の3羽家族であったという。このJ 69は1985年生まれの子である。著者等は, 1987年2月8, 10, 11日, 3月13, 15日に東干拓地と給餌地区の群内にこの個体を観察したが, 番になっているとは思われなかった。

黄色 J 79 この鳥は標識放鳥時の記録を基にすると1985年生れの満1歳鳥である。1986年11月, 12月, 1987年2月に給餌地区内で観察された。2月9日の観察では番になっていて, 幼鳥が1羽あるいは2羽一緒になっていた。標識時の記録と上の観察の両方が正しければ, 満1歳の越冬期には少なくとも番にはなっていた事例である。

マナヅル

橙色 15 給餌地区で1986年12月, 1987年2月に観察され, 番だけの2羽の家族であった。

黄色 J 04, J 05 西干拓地と給餌地区で観察され, J 04とJ 05は番で幼鳥2羽の4羽の家族であった。

黄色 J 14, J 15 J 14とJ 15は番で, 2羽の家族。1987年2月9日に初めて観察され, 以後, 西干拓地, 給餌地区で何度も観察された。J 14は, 左脚にJ 14, 右脚に金属脚環が付いていた。一方, 左脚にJ 15の脚環が付いているJ 15の右脚には, 金属脚環が付いていなかった。おそらく, 金属脚環は落ちたのであろう (この鳥は1984年1月24日に標識された)。

黄色 J 16 1986年11月, 12月, 1987年1月, 2月に東干拓地と給餌地区で観察された。12月には番の相手と思われる鳥と一緒に, 2月には, 明らかに番の2羽家族であった。J 16は1983年生まれで, 前冬には短かった養羽がよく伸びていた。その番の相手も, 養羽が同じように長く伸びている個体であった。

なおJ 16は, 前冬には繁殖地に向けて出水を去ってから1986年3月15—21日まで和歌山県日高郡美浜町で観察された鳥である。

黄色 J 17 番と幼鳥1羽の3羽の家族。J 17は前冬にも3羽の家族で12月下旬以後, 高尾野地区の唐笠木に定住していた。1986—1987年期には, 12月初旬まで発見できなかったが, 1987年1月初め以後, 唐笠木の前冬と同じ場所に定住していた。1987年2月7日の分散調査中には, さらに別の幼鳥2羽をまるで自分の子供であるかのように連れて生活していた。おそらく, 渡りを前にして自分の親鳥と離別した幼鳥が, 一時, J 17の家族に加わっていたのであろう。

山階鳥類研究所によって, 1987年の繁殖期に中国ザロン保護区の近くで繁殖したJ 17の幼鳥に標識が付けられたという (尾崎清明氏より安部宛私信)。

黄色 J 19 J 19は1983年生まれの子満3歳鳥である。番だけの2羽の家族。1986年11月, 12月, 1987年2月に西干拓地, 給餌地区で観察された。体の大きさから, J 19は雌と思われる。J 19の養羽は充分長く伸びているが, 番の雄の養羽はやや短かった。

黄色 J 32 番と幼鳥1羽の3羽の家族。西干拓地, 給餌地区で観察された。J 32の脚環は左脚に付いているが, すでに前冬の1985年11月の観察でも, 右脚に金属脚環は付いていない, 落ちたのであろうか。この個体は1985年1月に標識されている。

黄色 J 33 1987年2月に西干拓地内の群内に観察されただけで, 家族構成は不明。

黄色 J 54, J 55 J 54とJ 55は番の2羽家族。1986年11月, 12月, 1987年1月, 2月の調査中に西干拓地, 東干拓地, 給餌地区で観察された。J 54が雄, J 55が雌であらう。

J 55は, 1986年11月7日, 鶴展望所の北方面, 給餌地区の北部で防鶴網にひっかかっているところを保

護され、保護鳥用禽舎で11月10日まで保護飼育された。同日 8 時45分に展望所前で放鳥された。同日13時53分、東干拓地で J 54 と J 55 は一緒になっていた（この時、他の 1 羽の成鳥との間に、興味深い行動が見られたが、本報では省略）。

黄色060 1986年11月の調査中に給餌地区で 1 回観察しただけで、家族構成は不明。

白色 A 18, A 19 A 18 と A 19 は番で幼鳥 1 羽をつれた 3 羽家族。東干拓地、給餌地区で何度も観察された。

以上の記録から、前冬期（1985—1986 年）には観察されたが、今冬期（1986—1987 年）には観察できなかった標識鳥は、ナベヅルの黄色 J 11, 黄色 J 25, 黄色 J 29, 白色 A 52, J 60, J 62, 黄色 J 67, 黄色 J 68, マナヅルの橙色 16, 橙色 22 である。なお、上述のナベヅル黄色 J 25 は、1986 年 11 月 29 日に韓国京畿道金浦郡柿岩里で、約 240 羽のナベヅルの群内に発見されている（飯島正広氏から藤村宛私信）。

昭和61年度に標識されたと思われる標識鳥の観察結果 昭和61年度の標識の基礎資料は山階鳥類研究所・標識室によって発表されていないので、同室の60年度までの報告書（1983, 1984, 1985, 1986）を基に、野外識別用色脚環のこれまでの欠番号と上位番号の脚環、あるいは、これまで知られていない色脚環を付けている個体を61年度の標識鳥とみなして、観察記録を整理した。

ナベヅル

（1）**黄色 J 51** 左脚に J 51, 右脚に黄色の補助環。成鳥。1987 年 2 月の調査中に給餌地区内の群内に何度も観察された。しかし家族構成は明確に出来ず、おそらく、番になっていないと思われた。

（2）**黄色 J 70** 左脚に J 70, 右脚に赤色の補助環。幼鳥。又野末春氏により、保護飼育後に1987 年 1 月10日に標識された。1987 年 2 月, 3 月の調査中に西干拓地、給餌地区で観察された。1987 年 2 月 8 日には、脚環のない成鳥 1 羽についていたが、翌 9 日には幼鳥 3 羽の集団で観察された。3 月13日には、親鳥と一緒になれず、はぐれた状態で観察され、3 月27日には柳澤紀夫氏によって、残りの約60羽のナベヅル幼鳥内に観察された。

（3）**黄色 J 71** 保護飼育後に、又野氏によって1987 年 1 月 1 日に標識された。幼鳥。著者等はこの個体を 1 度も観察できなかった。

（4）**黄色 J 72** 左脚に J 72, 右脚に青色の補助環。幼鳥。保護飼育後、又野氏によって1987 年 1 月 1 日に標識された。この個体は、給餌地区内の鶴見亭東方、潮止め池のわきのソラマメ畑の防鶴網にひっかかっているところを 1986 年12月22日に保護された。1987 年 1 月 9 日には脚環のない番とこの幼鳥 J 72 の 3 羽の家族が、上述の地域に正常に生活しているのが観察され、以後、同年 1 月, 2 月の調査中、この家族は同じ農地に定住していた。

（5）**黄色 J 73** 左脚に J 73, 右脚に黄色の補助環。幼鳥。保護飼育後に又野氏によって1987 年 1 月12日に標識された。1987 年 3 月15日、旧飛行場地区内、掛腰で番と幼鳥 2 羽の 4 羽の家族の 1 羽として観察された。

（6）**黄色 J 74** 左脚に J 74, 右脚に黄色の補助環。成鳥。保護飼育後、又野氏によって1987 年 1 月10日に標識された。同年 2 月 8 日、野田川流域地区内、野田川中流左岸の農地にいる群内に観察された。家族構成は不明。

（7）**黄色 J 75** 保護飼育後、1987 年 1 月15日に又野氏によって標識された。著者等はこの個体を 1 度も観察できなかった。

（8）**黄色 J 76** 左脚に緑色の補助環、右脚に J 76。幼鳥。保護飼育後、又野氏によって1987 年 1 月 9 日に標識された。同年 2 月, 3 月の調査中に給餌地区で観察されたが、家族構成は不明。

（9）**黄色 J 80** 左脚に J 80, 右脚に黄色の補助環。成鳥。J 80 と J 81 が番で、J 82 と J 83 がその幼鳥、4 羽

の家族。1987年2月, 3月に西干拓地, 給餌地区内で観察された。同年3月18日には, 給餌地区内でこの4羽の家族が採食, 水浴後, J 80とJ 81の番と幼鳥J 83の3羽は西干拓地に飛び移ったが, 幼鳥J 82はそのまま給餌地区に残り, 近くにいたナベヅルの群内に歩いて入り, 特に変わった行動を示さず休んでいた。この状況は, 越冬期末期, つまり渡去期の前に親鳥その子供が離別を始める行動の表われであろう。その前々日, 3月16日には西干拓地にいたJ 80とJ 81とJ 82の3羽だけが観察され, 後に, この3羽の家族が給餌地区に飛び移るところも観察されている。

(10)黄色J 81 左脚にJ 81, 右脚に黄色の補助環。成鳥。上述のようにJ 80と番。

(11)黄色J 82 左脚に緑色の補助環, 右脚にJ 82。幼鳥。上述のようにJ 80とJ 81の子供の1羽。

(12)黄色J 83 左脚に緑色の補助環, 右脚にJ 83。幼鳥。上述のようにJ 80とJ 81の子供の1羽。

(13)黄色J 85 左脚に緑色の補助環, 右脚にJ 85。幼鳥。1987年2月, 3月の調査中に西干拓地, 給餌地区で観察されたが, 家族構成は不明。

(14)黄色J 86 左脚にJ 86, 右脚に黄色の補助環。成鳥。

(15)黄色J 87 左脚にJ 87, 右脚に黄色の補助環。成鳥。

(16)黄色J 88 左脚に緑色の補助環, 右脚にJ 88。幼鳥。

J 86とJ 87が番でJ 88はその幼鳥, 3羽の家族。1987年2月10, 11, 13, 14日の観察では, J 88がJ 86とJ 87の番の幼鳥であると判断できる状態は観察できなかった。しかし3月14日には, この3羽の家族が西干拓地で観察された。その後, 3月15, 18日には幼鳥J 88は給餌地区で観察できたが, J 86とJ 87は見られなかった。

(17)黄色J 89 左脚に緑色の補助環, 右脚にJ 89。幼鳥。1987年2月, 3月の調査中に何度も西干拓地, 給餌地区で観察された。しかし家族構成は不明。

(18)黄色J 90, (19)黄色J 91 いずれも, 左脚に緑色の補助環, 右脚にそれぞれJ 90, J 91。J 90, J 91とも幼鳥。両個体とも, 1987年2月, 3月の調査中に西干拓地, 給餌地区で観察された。J 89と同様に, 家族構成は不明で, それぞれの親鳥と一緒にあったかどうかは明らかでなかった。

(20)黄色J 92 左脚に緑色の補助環, 右脚にJ 92。幼鳥。1987年2月8日には給餌地区で, 脚環のない番・脚環のない幼鳥・J 92の4羽の家族として観察された。しかし, 2月9日には給餌地区で脚環のない番とJ 92の3羽の家族が観察された。以後, 2月10, 11, 15, 16日に給餌地区で観察されたが, 家族構成を明らかに出来る状態では見られなかった。

(21)黄色J 93 左脚に緑色の補助環, 右脚にJ 93。幼鳥。腹部の羽色がきわめて白色味の強い個体である。1987年2月, 3月の調査中に給餌地区で何度も観察できたが, 家族構成も親鳥と一緒にいるかも明らかに出来なかった。

(22)黄色J 94 左脚にJ 94, 右脚に黄色の補助環。成鳥。1987年1月の標識捕獲後, 放鳥されたが, 弱っていて保護され, 保護飼育後の同年2月に再放鳥された。全身の体羽が非常に白色味に富む特異個体である。1987年3月の調査中に給餌地区で観察された。番になっているかどうかは明らかに出来なかった。

(23)黄色J 95, (24)黄色J 96, (25)黄色J 97, (26)黄色J 98, (27)黄色J 99 いずれも成鳥。左脚に上述の黄色J脚環, 右脚に黄色補助環を付けている。J 95, J 96, J 97, J 99は, 西干拓地, 東干拓地, 給餌地区などで1987年2月, 3月の調査中に観察されたが, 家族構成は不明。J 98は, 1987年2月8日に折口川地区の折口で, 125羽のナベヅル群内に入っているところが観察されただけで, 家族構成は不明。

(28)補助環と同大同質と思われる黄色の脚環を左右の脛節に付けている個体 成鳥。1987年2月, 3月の調査中に給餌地区内で何度も観察されたが, 家族構成は不明。

(29)同じく, 左脛節に緑色環, 右脛節に黄色環を付けている個体 幼鳥。1987年2月9, 10, 11日には, 給

餌地区で採食する群内や群の外れに1羽で見られ、時どき目を閉じていたり、迷子の状態であった。2月12日には、給餌地区内で他の幼鳥3羽と群になって採食しているところが観察された。しかし2月13日午後、西干拓地において、脚環のない番・脚環のない幼鳥・この個体の4羽が、正常な4羽の家族と同様の行動を示して採食していた。その後の観察記録がないが、おそらく、もとの家族と一緒になれたのであろう。

(30)左脛節に黄色環(上)と緑色環(下)、右脛節に黄色環を付けている個体 成鳥。1987年2月11日に給餌地区で1回観察されただけで、家族構成は不明。

以上のように、1986—1987年期中に標識されたと推察されるナベヅル合計30羽のうち2羽(J71とJ75)を除く28羽を観察した。

マナヅル

黄色J77と黄色J78 いずれも、左脚にJ脚環、右脚に黄色の補助環。成鳥。1987年2月7, 9, 10, 14日に西干拓地、給餌地区で観察され、J77とJ78は番で、幼鳥は連れていなかった。

クロヅル

黄色J84 左脚にJ84, 右脚に黄色の補助環。成鳥・雄と思われる。ナベヅルと番で幼鳥2羽の4羽家族。1987年1月, 2月の調査中に西干拓地、給餌地区で観察された。その幼鳥2羽の羽色は、クロヅル幼鳥の特徴が混ざっていて、体もナベヅルにくらべると大きく見え、ことに1羽の幼鳥は大型であった。

その他の標識個体

マナヅル・白色A42 左脚に赤色の補助環、右脚にA42。成鳥。1986年12月, 1月, 2月の調査中に観察された。脚環のない個体と番の2羽家族であった。尾崎氏からの教示によれば、ソ連で標識された個体である(安部宛私信)。

ナベヅル 左脚には脚環はなく、右脚の跗蹠に金属脚環が付いている成鳥。1987年2月11, 12日に給餌地区で観察された。家族構成は不明。野外観察用の色脚環が落ちたものであろう。

結 び

1986—1987年期中の調査中に観察できた標識個体は下記の通りであった。

(1) 昭和60年度までに標識された個体

ナベヅル——橙色2, 10, 14, 25, 黄色J09, 21, 22, 23, 24, 26, 28, 30, 31, 36, 37, 40, 41, 43, 44, 45, 49, 50, 52, 53, 56, 57, 58, 59, 61, 63, 64, 65, 66, 69, 79, 白色A50, 51, 53, 左白色補助環の個体。合計39個体。

マナヅル——橙色15, 黄色J04, 05, 14, 15, 16, 17, 19, 32, 33, 54, 55, 060, 白色A18, 19, 合計15個体。

(2) 昭和61年度に標識されたと推察される個体

ナベヅル——黄色J51, 70, 72, 73, 74, 76, 80, 81, 82, 83, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 左黄色—右黄色, 左緑色—右黄色, 左緑色と黄色—右黄色, 合計28個体。

マナヅル——黄色J77, 78の2個体。

クロヅル——黄色J84。

(3) その他

ナベヅル——左・金属脚環のみの個体。

マナヅル——白色A42。

文 献

安部直哉・内田康夫・藤村仁. 1987. 鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査 第3報. 標識ツル類の
観察資料 1. 自然教育園報告18: 33—40.

飯島正広. (藤村仁への私信).

尾崎清明. (安部直哉への私信).

山階鳥類研究所・標識研究室. 1983. 昭和57年度・鳥類観測ステーション報告, 256—257.

——. 1984. 昭和58年度・同上報告, 221—224.

——. 1985. 昭和59年度・同上報告, 200—206.

——. 1986. 昭和60年度・同上報告, 156—163.

付 記

本報を執筆後、尾崎清明氏（山階鳥類研究所・標識研究室）より昭和61年度標識ツル類一覧表を1988年1月にいただいた。その一覧表と本報中の該当部分の記述を照合したところ、61年度の種別の野外識別用色脚環に関する本報の記述内容に誤りはなかった（ただし、さらに1羽、野外識別用色脚環を付けていないナベヅルが標識放鳥されている）。同氏は、その一覧表の本報への掲載を許可されたが、追加すべき事項がないので本報では載せなかった。この一覧表や標識時の基礎資料は同室の次年度報告書で発表されるであろう。

前述の1987年の繁殖期に中国ザロン保護区で標識された、マナヅルJ17の幼鳥について。この幼鳥とその家族は、今冬、鶴愛好者や報道関係者の話題になった。J17は例年、比較のおそく渡来する鳥で、今冬も1987年11月29日—12月3日の間に渡来したと推察される。1987年12月3日、唐笠木においてJ17の番とその幼鳥1羽の3羽家族を初めて観察した。その幼鳥の色脚環は、地色が赤色で、白抜きの番号61が縦に印されている。